

しんちゅう



第 119 号

2024 年 1 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



鳥の換羽について

津市 平井 正志

はじめに

鳥は、嘴、目、脚を除いて全身が羽毛に覆われている。我々が見ているのはその羽毛である。その羽毛はしだいに擦り切れ、また脱落し、どんどん生え変わっていく。これを換羽という。夏羽と冬羽が入れ替わることから分かるようにこの換羽は年2回を基本としている。しかし、換羽の仕方は鳥の種類によって、かなり変化があり複雑である。むろんまだ、分かっていない部分も多い。ここでは会員諸氏がよく目にするスズメ目の小鳥に絞って話を進めたい。猛禽、海鳥、シギ・チドリなどは換羽の仕方にそれぞれ別な変化がある。

鳥の羽衣

換羽の話に入る前にスズメ目の鳥の羽衣（うい）について頭に入れておいてほしい。鳥の羽衣の各部位の名称を覚えるのはバードウォッチャーの基本的知識でもある。図1 および図2 に示す。ここでは換羽を見るのに重要な部分だけを図示した。スズメ目では初列風切は10枚であるが、最外の1枚は小さくて野外では見えない。次列風切は6枚、その内側に三列風切が3枚ある。これらが飛ぶ時に最も重要である。その風切の根元を上から覆う、雨覆には初列雨覆、大雨覆などがある。

尾羽は普通12枚であるが、ウグイス、ヤブサメでは10枚である。

ヒナからの換羽順序

まずはヒナから成長する段階での換羽を見てみよう。巣の中の卵から生まれた鳥は全く裸か、あるいは少々の幼綿羽 (Natal Down あるいは Nestling Down) に包まれている。どちらの場合もその後、急速に幼綿羽が伸びる。ふわふわと綿毛に包まれたヒナである。この状態のヒナは巣の中にいる。

目次

鳥の換羽について-----	2
表紙の言葉-----	2
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	
—あとがき— -----	6
日本鳥学会 2023 年度大会に参加-----	11
2023 年 タカの渡り記録-----	12
中部内陸のタカ渡りと庭田山-----	14
推しの一枚 サンカノゴイ -----	15
野鳥記録-----	16
理事会報告-----	20
事務局だより-----	20
「第13 回くるくる環境フェスタ IN ベルファーム」に参加しました！ ----	21
探鳥会予告-----	21
探鳥会報告 (2023 年 8 月～ 2023 年 10 月)--	22
編集後記 -----	24

表紙の言葉

エナガ

度会町 小坂 里香

ごく身近にいるけれど、小柄な身体と素早い動きで、なかなか人に気づいてもらえないエナガ。

早春にコケやクモの巣などで独特のふわふわの巣をつくって子育てし、初夏にはたくさん子どもたちを連れて、にぎやかに鳴きかわしながら森や林を飛び回ります。小さな嘴で木の幹に隠れている昆虫をつついたり、葉っぱにぶら下がったり。バードウォッチャー以外にも大人気の亜種シマエナガに比べると、立派な太い眉毛があるだけの違い。なぜかシマエナガよりマイナーな存在ですが、愛らしいしぐさはバードウォッチャーのアイドルです。うちの小さな庭に来てくれた群れの中の一羽をパステルで描いてみました。

千葉県にはちょっと変わった風貌のチバエナガというのがいるらしい。いつかその子たちにも会ってみたいです。

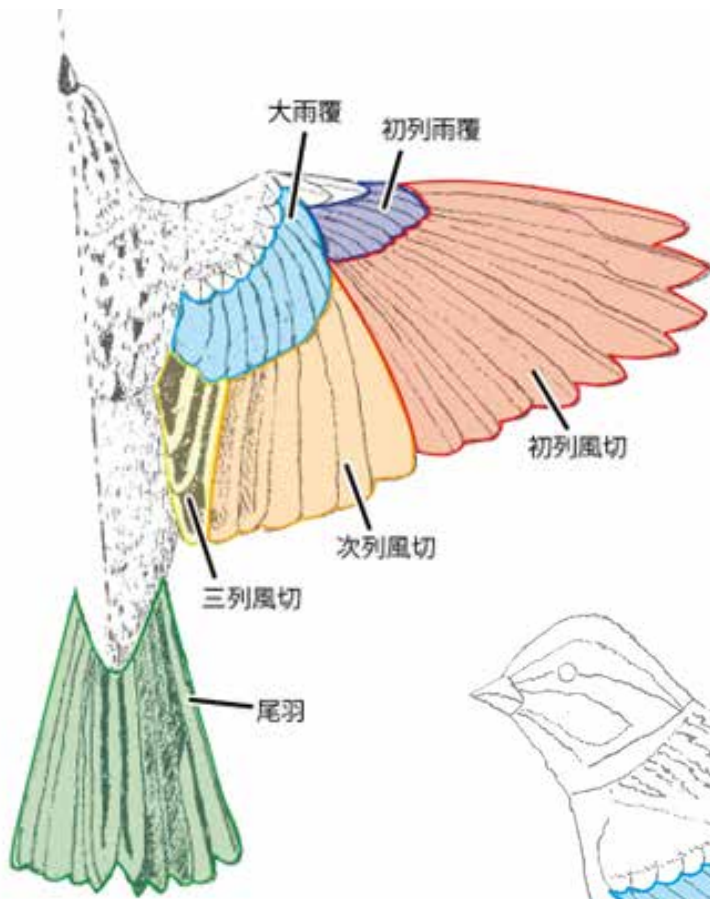


図 1. ホオジロの羽衣 I

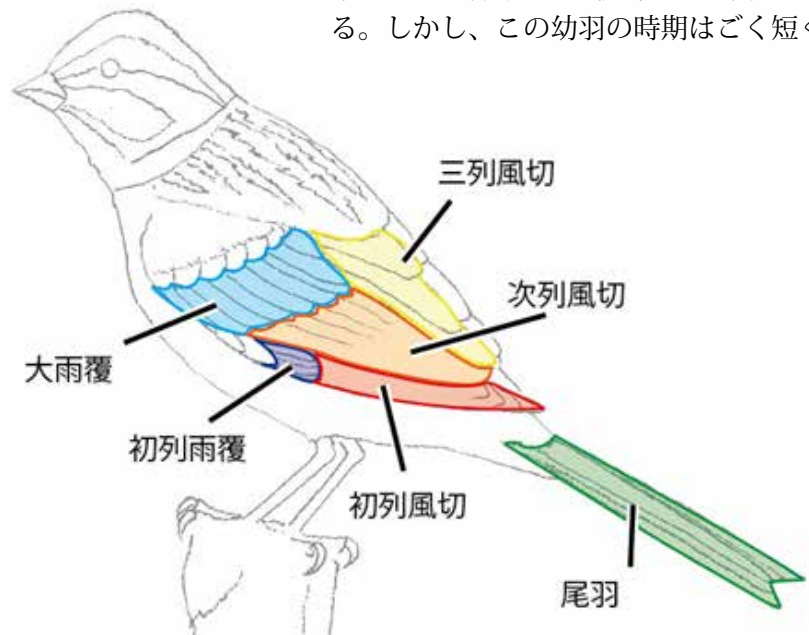


図 2 ホオジロの羽衣 II

次に幼羽 (juvenile: J) が生えてくる。この幼羽は親鳥の羽と色も形も違い、一目で幼鳥と分かる場合が多い。アカハラ、ノゴマ (図 3) などのツグミ類、オオルリ (図 4)、キビタキなどのヒタキ類などでは野外で普通に見る鳥の姿にない、淡色の斑点が頭部や体があり、一目で識別できる。ノゴマのこのような姿は繁殖期の北海道でも、目にする機会はそう多くない。

ホオジロ類の幼羽では顔に種特有の模様が見れず、雌雄は判らず、種名の判断に迷う場合もある。この幼羽の段階では風切や尾羽も揃い、一応飛べるようになり、巣立ちする。大きさも親鳥とほぼ同じである。しかし、この幼羽の時期はごく短く、



図 3 ノゴマ 性不明・幼羽 2019/8/12 北海道 帯広市 (今野 怜氏提供)
頭部および背に淡色斑点がある。



図4 オオルリ オス・幼羽 2006/9/3 三重県 青山高原 頭部、背に淡色斑がある。



図5 アオジ 性不明・幼羽 2015/7/11 北海道帯広市（今野 怜氏提供）



図6 ホオアカ 性不明・幼羽 2021/9/22 北海道音更町（今野 怜氏提供）

数週間で、行動も巣の近くに限られ、野外でこの幼羽の姿を見ることはやや稀であろう。ヒナは巣立ち後も短期間は親鳥から給餌を受けるがそのうち自立して生活する。

第1回冬羽

その頃、もう第2回目の換羽（幼羽後換羽）が始まっている。それが生え揃った段階が第1回冬羽（First Winter: 1W）と呼ばれる。この換羽は多くの場合、頭や体は換羽するが、翼や尾羽の一部、あるいは全部に幼羽を残しているのので、部分換羽といえる。ただし、種によって、換羽の程度や換羽する部位は様々で、かつ、個体間でも差があるので、ややこしい。渡りをする種ではこの1Wの姿で渡るものが多い。この時期、すなわち秋、当年に生まれた1Wの鳥と繁殖を終えた親鳥の2つのタイプの鳥がいることになる。この1Wの段階では、大きさも羽毛の色、形も繁殖を終えた親鳥と区別つきにくい。バンダーが標識調査で鳥を手にとって見た場合は別だが、特に野外では区別のつかない場合が多い。この識別については続編で詳細に述べる予定である。

第1回夏羽

翌春になると一部の鳥では夏羽への換羽（繁殖前換羽）があり、第1回夏羽（First Summer: 1S）となる。この繁殖前換羽は多くの場合、部分換羽であり、翼や尾羽は換羽しない。オオルリやキビタキのオスでは体羽が換羽し、初夏に見かけるあの鮮やかな色彩になる。

この時期、初夏、前年に生まれた鳥は1Sである。一方、2回目の、あるいはそれ以上の繁殖期を迎えた個体、すなわち2S、3S等は互いに区別のつかない場合が多く、まとめて成鳥夏羽（Adult Summer: AS）と認識される。

スズメ目の多くの鳥はこの1Sの状態、つまりほぼ1歳で繁殖可能になる。ただし、スズメ目でもハシボソガラスやハシブトガラスなど大型の鳥は、繁殖までにもう1年かかるようである。さらにカモメや海鳥、大型の猛禽などでは繁殖可能になるまで、何年もかかる種がある。

成鳥冬羽（AW）

この第1回目の繁殖が終わると冬羽への換羽（繁殖後換羽）となる。渡りをする種の多くは渡る前に換羽を終え第2回冬羽（Second Winter: 2W）となるのだが、スズメ目では、通常この繁殖後換羽の段階で幼羽の全てが脱落し、換羽する。すな

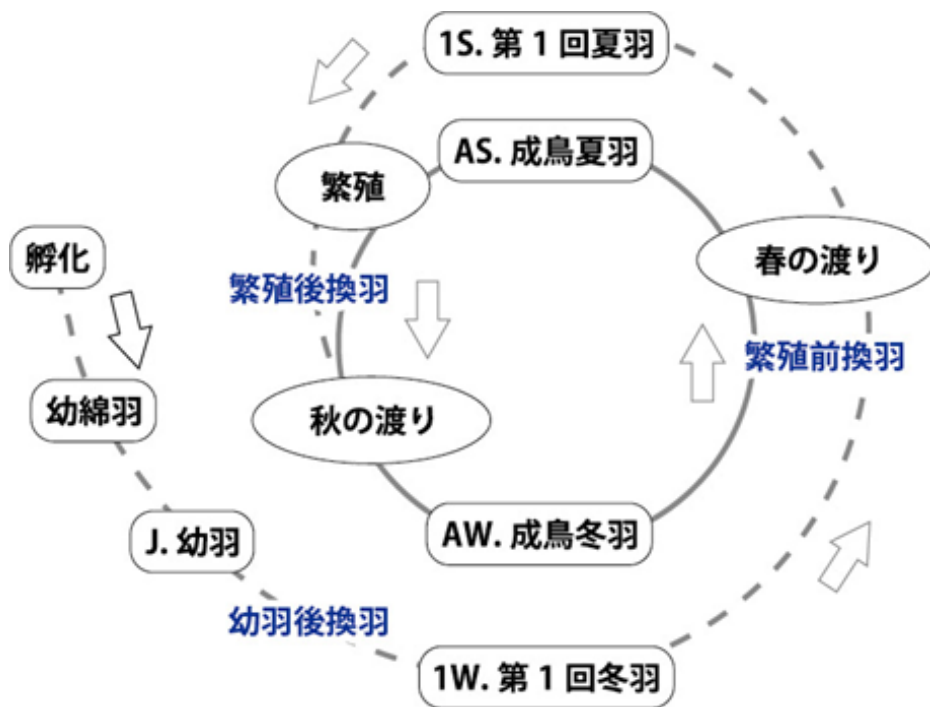


図7 換羽サイクル 点線は1歳未満の鳥のサイクル、実線は成鳥のサイクルを表す。

わち完全換羽である。したがって、2W以上の個体、3Wなどと全く区別つかない。故にこれらの個体はまとめて成鳥冬羽 (Adult Winter: AW) として扱われる。以降2W以降の個体を本稿では成鳥として著述する。

以上に述べたように、鳥の換羽は常時進行するのではなく、多くの場合、鳥の成長段階の限られた時期に進行する。換羽そのものにはエネルギーを使わざるを得ない。また、翼の換羽では運動能力が一時低下する。渡りや繁殖など多大なエネルギーを使う時期には重複しないように仕組みられているようである。

以上に述べた換羽の全体を図7に示す。

用語の問題

日本語での幼鳥、成鳥の区別は必ずしも明確ではない。この稿では幼鳥という言葉を使わないようにした。強いて言えば、幼羽 (Juvenile plumage) の段階の鳥が幼鳥 (Juvenile) である。第1回冬羽 (1W) の個体をどう呼ぶか、英文の書物ではそのまま First Winter (1W) としているものが多い。ここでもそれに従った。ただ、日本の鳥類標識調査では1Wのものも、幼鳥 (Juvenile: J) と表すことが多い。また、一般にも図鑑などでも成鳥と区別できる鳥という意味で幼鳥という言葉をよくつかわれている。一方、夏羽では2S以上は区別できないので成鳥夏

羽 Adult Summer: AS でよいであろう。種によっては1Sも2S以上と区別できないので成鳥 Adult と呼ばざるを得ない。本稿では成鳥という用語は2W以降の鳥に用いた。用語の問題はこれからも、論議の対象であろう。本稿では重要な用語には英文表記を加えたが、表記はここでは英国式とした。米語では異なる用語があるので、留意されたい。英文の書物には対照表があるので参照されたい。

あとがき

最近、鳥の換羽についての知識が重要であるが、適当な書物は見当たらないことに気づいた。それで、著者の知識も十分といえないが、著者なりに本稿をまとめてみた。読者の方々のご批判を乞う。なお、本稿中の写真の多くは鳥類標識調査中に知見を広めるため、撮影したものである。むろん、撮影後に放鳥した。

謝辞

山階鳥類研究所協力標識調査員 今野 怜氏には原稿を読んでいただき、多くの貴重な意見、示唆をいただいた。またいくつかの写真を使わせていただいた。また、三曾田 明氏には模式図や換羽サイクル図の作成に協力をいただき、記述についての相談に乗っていただいた。ここにお礼申し上げる。